

雨

季

とみ  
いえ  
ひるこ

部屋

つきつきと理くずれる音がして恋人の爪を切っている夜

天井の高いカフェには雨が似合う置き去りにされたものが冷えゆく

さらさらさら塗り絵の音が聞こえているわたしはきれいなひとを思い出す

あんなひとになりたくない君に言うひとでなしを見るような目のひとに

爪切りが火として光る部屋に棲むさみしい朝が死ぬほどだいじ

スープはいつもやさしい、やさしかった　ずっとやさしいままでもういい

ずぶ濡れ

もう駄目になって箸置く女の眉生きて死ぬことを教えてください

こびりついたパスタ一本引き剥がす朝に痛みしみわたるキッチンにいる

嘘つきが紫陽花のなかに手を入れる食べても食べてもいのち終わらず

つまさき町という名の町へ魚買いに雨に名まえを呼べばやさしい

人形に逢いたい夜のひとりきり子どもの残したセロハンテープ

リツイートする歌しない歌があり秘密はいつでも真冬へ向かう

ずぶ濡れの銘仙でゆく高架下幼いあなたと赤い飲みもの

おおかたが嘘と淀んだ空のこと真綿のようなわたくしの文

(夢よりもはかなき世の中) 雨を待つ寝たり起きたり忘れられたり

雹

声が出ないような気がする公園で夏にくるかもしれないひとを  
どうしよう月が粉々に散らばって突っ立っている此処がまんなか

「雹がね」とあなたが言ったと思う夕べくちをすばめてしんけんな眼で  
爪切りを女はさがす火が燃える音をみずから鳴らしたいため

うつむく、を丁寧にする六月の恋人が傘をたたむ街角

失った朝を迎えるしめつばさ誰かのために呟くもよし

ふつつりと声の途切れる中崎町こんな寂しくなってしまうて

兎

真夜中に家族のにおいせり出してぬるいお茶を飲む女がひとり

深爪のはなしを語り始める子 六月うまれの頬の静けさ

話したくなくなる夕べ深々とさいごまで刺すやさしさのこと

深々とやさしい膝へくずれゆく乾いた夏のおい水鏡

顔に濃い傷ができたのは夏至のことかわいそうな砂はさらさら

産み月にわたしが淋しい白湯を飲む秋や未明や岸辺が育つ

家のひと寝ているときに髪を切れば下の匂はいつも真夜中にある

風のある朝に兎になることも助詞をもらったままで雨季になる



歌集  
雨季

とみ  
いえ  
ひろ  
こ

ツイッター  
@hirokodori

ブログ うたう  
<http://d.hatena.ne.jp/hirokototomi/>

2014年 梅雨のおわりに